

長谷川慶太郎著「中国は民主化する」SBクリエイティブ 2020年3月26日刊を読む

独自の情報収集が正しい見方へ導く

1. 「海外の新聞」を読んで日本にはない見方を育む

- (1) ①私は昭和31年に「日刊金属特報」という業界紙の新聞社に入社しました。
 - ②そのとき目をつけたのが「海外の新聞」でした。
 - ③そのころ、日本に海外の新聞はほとんど入ってきませんでした。海外の新聞は郵送料が高いため、なかなか手に入らなかったのです。
- (2) ①しかし、大阪で唯一、海外の新聞をとっているところがありました。それはジェトロ(JETRO、日本貿易振興機構)大阪本部でした。
 - ②ジェトロの市場課に行くと、「フィナンシャル・タイムズ」「ニューヨーク・タイムズ」「ウォール・ストリート・ジャーナル」「ワシントン・ポスト」など、あらゆる大手の新聞が、揃っていました。
 - ③それを私は毎日、読んでいました。
- (3) ①海外の新聞を読むと、さまざまな発見があります。
 - ②たとえば1960年、アフリカのコンゴがベルギーから独立しました。
 - ③コンゴには非鉄金属が採れる資源地帯があります。しかし独立後、コンゴで資源開発をしていた会社が潰れて大混乱になりました。そしてこれが、世界中の非鉄金属(銅・鉛・亜鉛)相場を左右することになりました。しかし日本の新聞は、これを1行も取り上げません。
 - ④海外の新聞とは、記事の内容の違いが大きいことを知りました。

2. 日銀が情報の宝庫

- (1) ①その後、私は取材先を日銀の大阪支店にも広げました。
 - ②日銀の大阪支店には調査課があります。そこでは手形の再割引(一度、割引かれた手形を再び割引くこと)の審査をしております。つまり企業の出した手形に再割引ができるかどうか検討する部署です。
 - ③再割引ができなくなったら、その会社は倒産します。この審査をする人たちは、業界に通じていますので、私にとっては貴重な情報源となり、大変勉強になりました。
- (2) 調査課に出向いていた私は、どこの会社がいつ不渡りを出すかもわかるわけです。
- (3) これは普通の人(記者)は目につけないニュースソースでしょう。

3. 関西経済は地盤沈下へ

- (1) ①昭和36年、私は大阪から東京へ移住しました。理由は二つあります。
 - ②まず、左翼の人たちと縁を切ること。第2章で述べましたが、共産主義は人を幸せにしないということがわかったのです。

③もう一つは、大阪は経済的に地盤沈下すると見ていたことです。当時、大阪は東京の 3 分の 1 の経済規模でしたが、今や 10 分の 1 になってしまっています。私は当時からそれがわかっていたのです。

(2)①大阪が経済的に沈んだのには 2 つの理由があります。

②大阪では遊んでいる人が少ないのです。東京はそうではありません。

③もう 1 つは地理的な条件です。東京には関東平野という広大なベースがあります。一方、近畿地方は山が多くて、ベースとなる平野が小さいのです。

(3)①中央集権で官僚が東京にいるから大阪が地盤沈下したと言う人がいます。しかし、そうではないのです。アメリカはワシントンが政治の中心ですが、文化の面ではニューヨークが栄えています。中国も問題はありますが、北京が政治の中心で、上海が華やかな都市として栄えています。

②なぜ、日本においては東京が政治の中心で、大阪がダメになったのか。

なぜなら関西商人は、ケチだからです。いわゆる浪人を雇えません。浪人を雇えば情報入手の幅が広がります。でも大阪では商売相手の人間からしか情報が入りません。そうなる
と視野が狭くなり、先のことが見えなくなります。

③企業経営をしていく上で、ケチではダメです。浪人を雇うための無駄金を使わないと、広く情報は入ってきません。無駄金を使う覚悟が経営者がないと企業は発展しないのです。特に企業は中長期的な展望を確立するなら、どうしても無駄金が必要になるでしょう。

P.182 ~ 185

<コメント>

尊敬してやまない、2019年9月3日に御逝去なさった国際エコノミスト 長谷川慶太郎先生の遺著。習近平主席は中国の腐敗撲滅、国民生活の向上と国家の発展のために、資本主義・民主化の道を選び、全力を傾注しているという長谷川先生のお考えは傾聴に値する。そうであればいいと思う。長年にわたり、長谷川先生からは講演会や御著書、CD などを通して多くを学ばせていただいた。有難く、感謝いたします。

2020年4月10日(金)